



新たな自己愛人格尺度の作成

原田, 新

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(2):25-32

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81001013>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001013>



新たな自己愛人格尺度の作成

Development of the new narcissistic personality scale

原 田 新*
Shin HARADA*

要約：本研究の目的は、理論的には重視されているものの既存の自己愛尺度では測定できない、不適応的な自己愛の誇大性や、自己愛的な共感性の欠如を測定しうる新たな自己愛人格尺度を作成することであった。そして、Kernberg の理論に基づき、「誇大性」と「自己関心・共感の欠如」の2下位概念を設定し、Kernberg の述べる自己愛の臨床的特徴や DSM の記述などを反映させる項目を作成した。探索的因子分析の結果から仮定通りの2因子が得られ、両因子の α 係数は十分に高い値であった。また確認的因子分析の結果からは、許容範囲の適合度が示され、構成されたモデルは妥当であることが示された。また、弁別的妥当性、収束的妥当性、併存的妥当性の3つの観点から妥当性の検討を行った。その結果、「誇大性」はどの観点からも妥当性が示されず、不適応的な自己愛を測定しているとはいえなかった。一方、「自己関心・共感の欠如」は全観点からの妥当性が示され、また誇大・過敏の両側面に関わる概念であることを示唆する結果が得られた。以上のことから、今後の課題として「誇大性」については測定方法自体を慎重に再検討する必要性が挙げられ、「自己関心・共感の欠如」については今後この概念を用いて自己愛の適応・不適応の観点や誇大・過敏の観点を包括的に研究していくことが挙げられた。

1. 問題と目的

Raskin & Hall (1979) が Narcissistic Personality Inventory (自己愛人格目録, 以下 NPI) を開発して以降、自己愛に関する実証的研究においては NPI が最も盛んに用いられている尺度といえるだろう。日本においても同様に、NPI の日本語版 (宮下・上地, 1985; 大石・福田・篠置, 1987; 佐方, 1986 など) やその短縮版である NPI-S (小塩, 1999) が頻繁に用いられている。また近年、臨床理論 (Broucek, 1991; Gabbard, 1994; 岡野, 1998 など) において自己愛の過敏的側面の存在が注目されて以降、誇大・過敏の両側面を測定しうる自己愛尺度が作成されている (相澤, 2002; 中山・中谷, 2006; 高橋, 1998; 谷, 2004a など)。しかし、それらの誇大的側面は主に NPI を参考にして作成されたものであり、その誇大性については NPI で測定されるものとほぼ同様の概念を測定しているといえる。

そして、これまでの自己愛の実証的研究において、NPI などの自己愛尺度と様々な他の概念との関連を調査することで、自己愛の適応・不適応についての多数の検討がなされてきた。それらの研究結果から、過敏性については自我同一性や自尊心との負の相関 (谷, 2004b)、対人恐怖との正の相関 (中山・中谷, 2006) が見出されるなど、不適応の意味を有することが示唆されている。一方、

誇大性については、NPI と様々な指標との関連から、特に NPI の下位尺度の中でも「優越感・有能感」「自己主張性」が適応の意味を有することが指摘されている (小塩, 2004)。また、Watson & Biderman (1993) は「Exploitativeness/Entitlement」を、小塩 (2004) は「注目・賞賛欲求」を NPI の中で不適応的側面を意味する下位尺度であると述べている。これら2下位尺度は多くの共通する項目から成るとの指摘もあり (岡田, 1999)、国内外において NPI の中でも「注目・賞賛欲求」を不適応的概念とする共通見解があるともいえるが、「注目・賞賛欲求」に関しては、谷 (2004b) の結果で自我同一性や自尊心とはほぼ無関連であることが示されているなど、一概に不適応的であると言い切れない結果も見受けられる。ところで、谷 (2006) の結果からは、「注目・賞賛欲求」が誇大・過敏の両側面に関わる概念であることが示されており、NPI の中でも「優越感・有能感」「自己主張性」の2因子と「注目・賞賛欲求」は誇大・過敏の位置付けにおいても異なることが示唆されている。

すなわち自己愛に関する先行研究においては、「優越感・有能感」「自己主張性」等の自己愛の誇大性は適応の意味を有し、「自己愛性抑うつ」「自己愛的憤怒」 (谷, 2004a) や「評価過敏性」 (中山・中谷, 2006) 等の過敏性は不適応の意味を有し、両者に関わる概念である「注目・賞賛欲求」は適応・不適応に関してどちらとも言い切

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科博士課程後期課程

(2008年9月1日 受付)
(2009年1月16日 受理)

れない概念であるとする結果が得られているといえるだろう。これらの結果は先行研究において安定的に見出されている結果であり、自己愛の実証的研究における一般的な見解となりつつあるように思われる。

しかし、以上のような自己愛の実証的研究から得られた知見は、自己愛の臨床理論を考慮した場合、特に誇大性の先行研究における結果に問題点が存在するように思われる。そもそも自己愛概念は、Ellis (1898) や Freud (1914) によって病的な現象を説明する為に心理学や精神分析に取り入れられた概念であるが、例えば Kernberg (1975, 1982, 1984) が、自己の心的発達の観点から、正常な自己愛と病的な自己愛を区別して理論を構築しているなど、その後の理論においては自己愛を健康なものと病的なものに区別して論じているものが多い(狩野, 1995)。また、Pulver (1970) は、様々な臨床家や理論家の述べる自己愛についての分類をする中で、健康な自己愛が防衛的ではない自尊心に関連する一方、不健康な自己愛が好ましくない自己評価に対して自身を防衛するという防衛的性質に関連するとしている(小塩, 2004)。すなわち、この健康な自己愛と病的な自己愛とは共に主観的な自己評価の高さに関連するものであると考えられるが、前者は現実に根ざした評価であり後者は非現実的で防衛的なものであるという点で、その性質が異なっているといえる。ところで、上述したように、NPI の特に誇大性に関する自己愛概念は適応的意味を有することが示唆されているが、元々 NPI が健康な自己愛を測定することを意図して作成されたとは考えにくい。なぜなら、NPI を用いた初期の研究では、その構成概念的妥当性の検討において、アイゼンク人格目録の「精神病」尺度との正の相関(Raskin & Hall, 1981) や、「共感性」尺度との負の相関(Watson, Grisham, Trotter, & Biderman, 1984) などが妥当性の根拠として示されているからである。つまり、不適応的概念との正の相関や、適応的概念との負の相関が妥当性の根拠とされており、このことから元々 NPI は一般の人の中にある不適応的な自己愛を測定する目的で作成されたと考えられる。しかし、結果的に後になされた多数の研究から NPI の誇大性は適応的であると示唆されており、Raskin & Hall (1979) の作成当初の意図とは異なる尺度になっている可能性がある。以上のことから、まず1つ目の問題点として、臨床理論でいわれる不健康な自己愛と NPI を用いた実証研究による結果の不一致から、自己愛概念の適応・不適応に関する混乱が生じているのではないかと考えられる。例えば、「健康な自己愛」を測定する NPI を用いた研究論文において、その問題と目的や考察で「不健康な自己愛」についての臨床理論を援用することは矛盾するように思われるが、そのような論文が散見されることは自己愛概念の混乱によるものであると思われる。2つ目の問題点として、既存の自己愛尺度では、不適応的な自己愛の特徴とされる非現実的で防衛的性質を備えた誇大感に関する研究を行うことが困難であることが挙げられる。小此木 (1981) は青年期の自己愛の高まりと自我同一性の発達との関連について論じているが、そこで述べられる自己愛は非現実的に肥大化した防衛的性質を有する自己愛であると考えられ、青年期理解や青年の自己発達の様相についての研究にはそのような自己愛尺度が欠かせないものであると思われる。また、近年自尊心の安定性理論(Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993) が注目され、自尊心の不安定性や変動性に自己愛が関連することが指摘されている(小塩, 2001; Rhodewalt,

Madrian, & Cheney, 1998) が、ここでいう自己愛も健康な自己愛ではなく不適応的な自己愛を意味していると考えられる。このような研究を行う上でも、NPI とは異なる不適応的な誇大性を測定する自己愛尺度が必要とされるのではないかとと思われる。

また、上記の適応・不適応に関する点に加え、近年日本の自己愛研究において最も頻繁に使われている NPI-S やそれに類する自己愛尺度には、内容的妥当性に関する問題点も存在すると考えられる。そもそも Raskin & Hall (1979) が作成した NPI は、DSM-III の自己愛人格障害に関する記述に基づいて質問項目を作成した尺度である。すなわち、DSM-III で記載される自己愛概念の特徴を包括的に幅広く含む項目群になるように作成された尺度であるといえる。しかし NPI-S は、「優越感・有能感」「注目・賞賛欲求」「自己主張性」の3因子のみから構成される尺度であり、自己愛概念を包括的に測定できるとはいえないと考えられる。このことは、小塩 (1999) 自身も NPI-S の問題点として示唆しており、NPI-S の下位側面はその全てを網羅しておらず、NPI-S 全体としての内容的妥当性には疑問が残ると述べている。また、その他の自己愛尺度についても、その誇大性については元々の NPI を参考に作成されていたとしても、DSM の診断基準を網羅的に捉えているものは無いといえる。

加えて、そもそも Raskin & Hall (1979) の NPI にも内容的妥当性の問題があると思われる。具体的には、「共感性の欠如」という DSM でも重視されている自己愛概念を含んでいない点である。「共感性の欠如」は、DSM-IV-TR (APA, 2002) の自己愛性パーソナリティ障害における診断基準の一つに挙げられ、更にその診断的特徴の中で「誇大性」「賞賛されたいという欲求」と共に基本的特徴であるとされるなど、自己愛概念の中でも欠かせない特徴であるといえる。また、代表的な自己愛の理論家である Kohut と Kernberg の両理論に共通して見られる自己愛の臨床的特徴であり(伊藤, 1989)、臨床理論においても重視されている自己愛概念であるといえる。それゆえ、実証的研究において自己愛人格を幅広く捉える際には、「共感性の欠如」も下位概念に含む尺度を用いるべきであると思われるが、NPI や他の自己愛尺度においては考慮されておらず、この点は内容的妥当性の重要な問題点なのではないかと考えられる。

以上のことから、既存の自己愛尺度では、不適応的な自己愛の誇大性が測定できない点、内容的妥当性に問題があり重要な自己愛概念と考えられる「共感性の欠如」を考慮していない点に問題があるといえるだろう。そこで、本研究においては、先行研究において見出されていない不適応的な誇大性や、「共感性の欠如」を測定する自己愛人格尺度を作成することを目的とする。それを作成することで、今後の研究において不適応的な自己愛に関する研究を行うことが可能となり、健康な自己愛との相違や関連を検討することで自己愛概念の混乱の解消にもつながるのではないかとと思われる。

ところで、不適応的な自己愛を測定する項目を作成する際には、病的側面を示す DSM の記述を参考にするのが良いと思われるが、DSM の診断基準は複数の理論を参考にして作成されたものであり、特定の理論を背景にしているわけではない。それは、DSM の診断基準をそのまま参考に作成された NPI にも同様のことが当てはまるといえる。この点に関し、上地・宮下 (1992) は、DSM-III の診断基準は、記述精神医学的な基準であり、自己愛の発達についての統合的な理論に基づくものではないと指摘し、上地・宮下 (2005)

ではそれを問題点に挙げて Kohut 理論に基づく自己愛的脆弱性尺度 (Narcissistic Vulnerability Scales ; 以下 NVS) を作成している。特定の自己愛理論に基づく尺度を用いて実証的研究を行った場合、自己愛の発達や病理を検討する上で、研究結果をその理論に基づいて詳細に解釈することが出来るという利点があるのではないかとと思われる。そこで、本研究においても、特定の理論に基づきながら自己愛尺度の下位概念設定を行うこととする。その際、DSM の診断基準作成の際に影響を与えたとされる自己愛の代表的な理論として、Kohut (1971, 1977 など) の理論と Kernberg (1975, 1982, 1984 など) の理論が挙げられるが、Kohut 理論では自己愛の過敏性や脆弱性に焦点が当てられている一方、Kernberg 理論では誇大性や自己顕示性が中心的に扱われ、DSM で示される自己愛者の臨床像に相当することが指摘されている (Gabbard, 1994; 上地・宮下, 2005)。このような両理論の特徴を考慮すると、本研究では不適応的な誇大性や「共感性の欠如」を測定しうる尺度の開発を目的とする為、Kernberg の理論に依拠するのが適しているように思われる。

本研究においては、臨床群ではなく一般大学生の不適応的自己愛を測定しうる尺度の作成を目指すこととする。不適応な自己愛に関する理論は、臨床群の患者の治療や分析から得られた知見から構築されたものであり、それを一般大学生の理解に適用できるのかという疑問もある。特に Kernberg の理論については、上地・宮下 (1992) が、重篤な自己愛人格障害患者の特徴や力動を理解するには有効であるが、より軽症の自己愛的障害を含めて統一的・連続的に捉えることができないように思われるとの問題点を指摘している。このことから、Kernberg の理論に基づく自己愛人格尺度を健常者を対象に実施することは不適であると考えられるかもしれない。しかし、小此木 (1984) は、自己愛パーソナリティの持ち主全てが精神科医の臨床の対象になるとは限らず、正常範囲の自己愛パーソナリティの持ち主も多数いるとし、自己愛を正常心理から精神病理にわたる同質的・連続的な共通の心理傾向であることを指摘している。また、臨床場面を訪れて自己愛的な傾向が高いと診断される人々は、一般社会に暮らす自己愛的な傾向が高い人々の部分集合であるとみなされるため、臨床場面における自己愛は一般的な人々がもつ自己愛と構造的に一致すると仮定される (小塩, 2005) との指摘もある。さらに、Kernberg (1984) はその臨床レベルでの理論において、自己愛病理のスペクトルを仮定している。そして、自己愛人格が最も高次に機能する水準では、「表面的には良い適応を示す」ことや合併症状が併発されない限り、ほとんど治療に訪れることは無いこと、スペクトルの中間領域に位置する自己愛人格者が、“社会的効力の及ぶ広い範囲に沿って活動し、表面上の機能の低下は示さないかもしれない” (p. 154) と述べていることから、スペクトルの軽度から中間領域に位置する自己愛人格者の中には、一般社会で生活している人も多数いるのではないかと推測される。これらのことから、不適応的自己愛に関して臨床群と一般人との間に連続性を仮定し、Kernberg の理論に基づく自己愛人格尺度を一般大学生対象に実施することは、それほど不適なことではないと思われる。そこで、本研究においては、Kernberg (1975, 1982, 1984 など) の理論に基づきながら、新たな自己愛人格尺度を作成し、その妥当性と信頼性について検討することを目的とする。

2. 方法

1) 下位概念設定

まず、Kernberg (1984) は、自己を「全発達段階から統合された自己表象の総和」と定義し、自己愛とは「自己へのリビドー備給を反映したもの」であると考えた。また、病的な自己愛人格とは、現実自己表象、理想自己表象、理想対象表象が病的に融合した病的誇大自己へのリビドー備給を反映するものとされる (Kernberg, 1984)。そして、Kernberg (1975) は、病的な自己愛人格について、“自己愛人格の中心的特性は、「誇大性 grandiosity」「極端な自己中心性 extreme self-centeredness」、他者からの賞賛や支持を熱望する事実があるにも関わらず、「他者への関心や共感の顕著な欠如 a remarkable absence of interest in and empathy for others」である” (p.228) と述べている。この記述から、Kernberg 理論における不適応的な自己愛人格を測定するのに適した下位概念は、「誇大性」「自己中心性」「他者への関心・共感性の欠如」の3概念であることが示唆されているといえる。

ただし、Kernberg 理論を考えると、「誇大性」は独立した概念であるが、残りの2概念は意味合いの重なる部分が多いように思われる。Kernberg (1982) によると、病的な自己愛人格における心的発達は、分離・個体化過程の再接近期に留まり、対象恒常性の段階にまで進むことが出来ていない状態であるとされる。そして、良い自己表象と悪い自己表象、良い対象表象と悪い対象表象のそれぞれを統合する代わりに、良い(理想的な)自己表象と良い(理想的な)対象表象のみを取り上げ、それらを融合させる (Kernberg, 1982)。この病的な融合は、「対人領域の耐え難い現実に対する防衛として」行われるものであり、結果として現実自己表象、理想自己表象、理想対象表象が混在する病的誇大自己を生じさせる (Kernberg, 1975)。それにより、自己愛人格者は非現実的で理想化された自己に関する観念を構成し、大変な誇大感を抱いたままの状態に留まることになり (Kernberg, 1982)、「誇大性」が生じるものと考えられる。一方、残りの受け入れ難い悪い自己表象と悪い対象表象は自分自身から乖離され、抑圧されるか外的対象に投影される。その結果、投影された“悪い”対象を過小評価し、攻撃性を表現するパターンを作り出す (Kernberg, 1982)。そして、そのような他者を軽視し、自分にばかり関心が向いている状態では自己中心性や他者への関心の欠如が、また他者を侮蔑的に扱う時には他者への共感の欠如が生じるものと考えられる。すなわち、悪い自己表象や悪い対象表象が他者に投影されたことを反映する自己愛的心性が「自己中心性」や「他者への関心・共感性の欠如」であると考えられ、現実自己表象を良い自己表象や良い対象表象と防衛的に同一視する結果生じる「誇大性」とは意味合いが異なると考えられる。そして、「自己中心性」と「他者への関心・共感性の欠如」は、他者に悪い自己表象と悪い対象表象を投影するという同一プロセスの結果を反映する心性であるならば、2つの概念として捉えるよりも、1つの概念の2側面を表すと考える方が妥当であると思われる。そこで、本研究においては、「自己中心性」と「他者への関心・共感の欠如」の2側面を含む「自己関心・共感の欠如」という1つの下位概念を設定し、「誇大性」と合わせた2下位概念の自己愛人格尺度を作成することとする。その際、Kernberg (1975, 1982) の記述に基づき、「誇大性」を「現実自己表象、理想自己表象、理想対象表象が混在する病的誇大自己から生じる防衛的で非現実的に肥大

化した誇大感」,「自己関心・共感の欠如」を「悪い自己表象や悪い対象表象が他者に投影された結果生じる, 他者への無関心や他者への共感性の欠如」と操作的に定義する。そして, Kernberg (1975, 1982, 1984) の述べる自己愛者の臨床的特徴や DSM の記述などを参考に, 定義に沿うよう 2 下位概念を表す項目群の作成を目指す。

2) 妥当性の検討

①弁別的妥当性

小塩 (1998) においては自己愛の類似概念として自尊心が挙げられており, 実際多数の先行研究において自己愛の誇大性と自尊心との正の相関関係が見出されている (Emmons, 1984; 小塩, 1998; 谷, 2004b など)。しかし Kernberg (1982) は, 過剰な自己評価を持つ一方, 他者からの賞賛を得られない時には劣等感を抱くという自己愛人格者の自己評価の不安定性について述べており, 本研究で意図する自己愛人格と自尊心とは無相関であると予測される。そこで, 自己評価を測定する自尊心尺度 (山本・松井・山成, 1982) を用いて, その関連を検討する。

②収束的妥当性

Kernberg (1975) は, 病的誇大自己の形成要因の一つに口愛的攻撃性が発達してくることを挙げており, 病的自己愛人格と攻撃性との正の関連が予測される。また, 悪い自己表象や攻撃的な超自我の他者への投影が, 迫害的な外的対象の発達を引き起こすとも述べており (Kernberg, 1982), 自己愛人格者は他者からの敵意を感じていることも示唆されている。そこで, 敵意や攻撃性などを測定する, 日本版 Buss - Perry 攻撃性質問紙 (安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999) を用い, その関連を検討する。

また, Kernberg (1975, 1982, 1984) では, 自己愛人格者の特徴として他者に対する搾取性を強調するなど, 自己愛人格者と人間関係における対人的な不調和性との正の関連が予測される。そこで, Big Five 尺度 (和田, 1996) の下位尺度のうち「調和性」因子を用いて, その関連を検討する。

③併存的妥当性

本研究での自己愛人格尺度は不適応的な自己愛の測定を意図して作成されるものであり, その点で既存の自己愛尺度の誇大性を測定する概念とは意を異にしている。しかし, 適応・不適応の違いはあれど, どちらも自己愛概念を測定するものであり, 共通する部分もあるのではないかと考えられる。ゆえに, 既存の自己愛尺度の誇大性とは低い正の相関を示すと予測される。そこで, 谷 (2004a) の自己愛人格尺度 (Narcissistic Personality Scale; 以下 NPS) の下位尺度のうち誇大性を測定する「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」を用いて, その関連を検討する。それに加え, NPS の他の下位尺度を含んだ全 5 下位尺度と本研究で作成する自己愛人格尺度の 2 下位尺度を合わせた 7 下位尺度を用いて下位尺度得点の因子分析を行うことにより, 各変数の誇大・過敏の位置づけについても検討することとする。

3) 調査対象者

兵庫県内の 18 ~ 25 歳の大学生, 専門学校生 662 名 (男性 331 名, 女性 331 名, 平均年齢 19.73, $SD=1.51$ 歳)

4) 測定尺度

①新たな自己愛人格尺度の項目候補

Kernberg (1975, 1982, 1984) で記述される自己愛者の臨床的特徴や DSM の自己愛人格障害の記述等を参考とし, 上述した「誇

大性」「自己関心・共感の欠如」の 2 下位概念の定義に沿うように各 15 項目ずつ計 30 項目を作成した。この 30 項目について, パーソナリティ心理学を専門とする大学教員 1 名, 大学院生 2 名とともに数回の協議を行い, 内容的妥当性の検討をして確認された。検討をする際, その 2 名に対して特に留意するよう求めたのは, 「誇大性」の項目内容が「防衛的で非現実的に肥大化した誇大感」という定義に沿うような内容であるかを確認することであった。そして, 定義にそぐわないと判断された項目については, 2 名から定義に合うと判断されるまで内容を改善した。「1. 全く当てはまらない」, 「2. 当てはまらない」, 「3. やや当てはまらない」, 「4. どちらともいえない」, 「5. やや当てはまる」, 「6. 当てはまる」, 「7. 非常に当てはまる」の 7 件法。

②自尊心尺度

Rosenberg (1965) によって作成された Self-Esteem Scale の邦訳版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。ただし, 項目 8 については, 谷 (2001) が内容的に異質であることを指摘している為, これを除外した計 9 項目を用いた。「1. 当てはまらない」, 「2. やや当てはまらない」, 「3. どちらともいえない」, 「4. やや当てはまる」, 「5. 当てはまる」の 5 件法。

③日本版 Buss - Perry 攻撃性質問紙 (the Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire; 以下 BAQ)

安藤他 (1999) によって作成された攻撃性を多面的に測定する尺度。「身体的攻撃」(6 項目), 「短気」(5 項目), 「敵意」(6 項目), 「言語的攻撃」(5 項目) の 4 因子, 22 項目からなる。「1. 当てはまらない」, 「2. やや当てはまらない」, 「3. どちらともいえない」, 「4. やや当てはまる」, 「5. 当てはまる」の 5 件法。

④調和性の指標

和田 (1996) の Big Five 尺度の下位尺度のうち, 「調和性」因子を用いた。全 12 項目。「1. 全く当てはまらない」, 「2. ほとんど当てはまらない」, 「3. どちらかという当てはまらない」, 「4. どちらともいえない」, 「5. どちらかという当てはまる」, 「6. かなり当てはまる」, 「7. 非常に当てはまる」の 7 件法。

⑤ NPS

谷 (2004a) によって作成された, 自己愛の誇大特性, 過敏特性の両側面を多面的に測定する尺度。「有能感・優越感」(10 項目), 「注目・賞賛欲求」(9 項目), 「自己主張性・自己中心性」(10 項目), 「自己愛性抑うつ」(9 項目), 「自己愛的憤怒」(8 項目) の 5 因子, 46 項目からなる。「1. 全く当てはまらない」, 「2. 当てはまらない」, 「3. やや当てはまらない」, 「4. どちらともいえない」, 「5. やや当てはまる」, 「6. 当てはまる」, 「7. 非常に当てはまる」の 7 件法。

5) 調査時期および手続き

調査は 2 回に分けて行った。新たな自己愛人格尺度の項目候補については 2 回にわたり全調査対象者に, 他の尺度については調査対象者により異なる組合せで実施した。各尺度の調査対象者は, 「自尊心尺度」「BAQ」「調和性」で 240 名, 「NPS」で 422 名であった。そして, 各尺度の組合せからなる無記名の個別記入形式の質問紙を大学および専門学校での講義中に配布し, 一斉に実施した。調査時期は, 2006 年 6 月および 10 ~ 11 月であった。

3. 結果

1) 新たな自己愛人格尺度の項目候補の因子分析

①探索的因子分析

自己愛人格尺度 30 項目候補について探索的因子分析（主因子法）を行った。因子構造を検討したところ、固有値の減衰状況と解釈可能性から 2 因子を抽出した。そして再度探索的因子分析（主因子法、Promax 回転）を行い、(1) 因子負荷量の絶対値が .40 以上で、(2) 複数因子に .40 以上で重複しないという基準を設け、それに合致しない 7 項目を削除した。最終的に残る 23 項目に対して実施した因子分析結果（主因子法、Promax 回転）を Table 1 に示す。2 因子の累積寄与率は、42.14% であった。2 因子は当初仮定された下位概念に対応するものであり、第 1 因子は「自己関心・共感の欠如」、第 2 因子は「誇大性」を表す項目群であった。因子間相関は .455、下位尺度間相関は .384 ($p < .001$) であり、2 因子は相互に関連しあう結果であった。平均値 (SD) は、全体で 70.057 (17.472)、「自己関心・共感の欠如」で 36.085 (10.843)、「誇大性」で 33.973 (10.156) であった。以上、23 項目、2 下位尺度をもって、自己愛人格尺度とした。

②信頼性の検討

得られた 2 因子の内的整合性を検討する為に、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、「自己関心・共感の欠如」で $\alpha = .859$ 、「誇大性」で $\alpha = .859$ であり、内的整合性の観点からの信頼性は十分であった。また、尺度全体でも $\alpha = .882$ と十分に高い値であり、尺度全体として一貫した概念を測定するものであることが示唆された。

③確認的因子分析

探索的因子分析の結果をもとに確認的因子分析を行った。仮定したモデルは、「自己関心・共感の欠如」「誇大性」の 2 因子構造で、因子間には相関を仮定した。分析の結果を Table1 に示す。モデル

の適合度指標は、GFI=.892、AGFI=.869、RMSEA=.063 であった。GFI、AGFI が .90 を上回っていないものの、観測変数の多さに影響を受けないとされる RMSEA は .08 を下回っており、適合度は概ね十分な値であることが示された。また、因子間には .47 の相関が示された。

④弁別的妥当性の検討

自己愛人格尺度と自尊心尺度との相関係数を検討した (Table2)。その結果、「自己関心・共感の欠如」は「自尊心」と無相関であった一方、「誇大性」と「自尊心」とは高い正の相関を示した。この結果から、「自己関心・共感の欠如」は仮説通り「自尊心」と弁別される概念であるが、「誇大性」は予測に反し「自尊心」とは明確に弁別されない概念であることが示唆された。

⑤収束的妥当性の検討

自己愛人格尺度と BAQ の全下位尺度、Big Five 尺度の「調和性」因子との相関係数を検討した (Table2)。その結果、「自己関心・共感の欠如」は、BAQ の全下位尺度、全体得点、Big Five 尺度の「調和性」と低い、もしくは中程度の正の相関を示した。一方、「誇大性」は、BAQ の「言語的攻撃」と低い正の相関、「敵意」と低い負の相関を示し、BAQ の「身体的攻撃」「短気」、全体得点、Big Five 尺度の「調和性」とはほぼ無相関であった。以上の結果から、「自己関心・共感の欠如」は仮説通りの結果を示した一方、「誇大性」は「言語的攻撃性」との相関結果を除き、仮説に反する結果を示した。

⑥併存的妥当性の検討と誇大・過敏の位置づけ

自己愛人格尺度と NPS の「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」因子との相関係数を検討した (Table3)。その結果、「自己関心・共感の欠如」は、「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」の両因子と低い正の相関を示した。一方、「誇大性」は、「有

Table 1. 自己愛人格尺度の因子パターン（主因子法・Promax 回転）

項	目	F1	F2	CF ^{a)}
<自己関心・共感の欠如>				
自 13.	欲しいものを手に入れるためには、他人をだますのも仕方ないと思う。	.70	-.04	.70
自 4.	困っている人がいるとき、何のメリットもない場合には助ける気にならない。	.68	-.08	.63
自 10.	利用価値の無い人とは付き合いたくないと思う。	.67	-.02	.64
自 15.	自分の目的を達成するためなら、他人を巻き添えにしても仕方ないと思う。	.66	.08	.71
自 14.	出世するためなら、嘘をつくこともいとわないだろう。	.62	.03	.66
自 3.	自分の発言が他人を傷つけたとしても、気にしない。	.57	.02	.57
自 9.	自分のために他人を利用することを、必ずしも悪いとは思わない。	.57	-.02	.58
自 5.	他人の悩みを心配する暇があるなら、自分のことを優先すべきだと思う。	.57	-.05	.53
自 11.	たいていの人たちは、自分の役に立つと思うから友だちを作るのだと思う。	.57	-.08	.51
自 8.	地位の高い人としが付き合う気になれない。	.50	.14	.55
自 2.	他人の話には興味を持ってないことが多い。	.49	-.13	.41
自 6.	能力の無い人が落ちぶれるのはしょうがないと思う。	.45	.03	.47
<誇大性>				
誇 10.	私は人から尊敬されるべき人間であると思う。	-.06	.77	.74
誇 15.	私は、将来偉大な人物になるだろう。	-.17	.76	.65
誇 6.	私は、自分の能力に誰にも負けない自信を持っている。	.00	.68	.68
誇 9.	私は自分の才能に驚くことがある。	.06	.65	.69
誇 5.	自分の能力がいかに優れているかを人に教えたい。	.02	.64	.65
誇 1.	私の外見は、誰に対しても自慢できると思う。	.07	.60	.63
誇 11.	私は特別な人間であるので、人より優先されるべきだと思う。	.28	.54	.69
誇 13.	将来、自分が成功している姿をよく想像する。	-.10	.52	.46
誇 14.	私が将来失敗している姿は、想像できない。	-.10	.52	.45
誇 2.	自分の姿を鏡で見ることは好きである。	-.06	.49	.45
誇 7.	私は、自分の考えが常に正しいという自信を持っている。	.17	.45	.54

自:「自己関心・共感の欠如」、誇:「誇大性」を表す

a) CF 列における値は、確認的因子分析 (Confirmatory Factor Analysis) における当該因子の因子負荷量を表す。

能感・優越感」と非常に高い正の相関、「自己主張性・自己中心性」と中程度の正の相関を示した。以上の結果から、「自己関心・共感の欠如」は仮説通りの結果を示したが、「誇大性」は仮説に反し、既存の尺度で測定される適応的な自己愛概念と非常に類似する概念であることが示唆された。

また、自己愛人格尺度の2因子の誇大・過敏の位置づけを明確にする為に、谷（2006）の方法に倣い、自己愛人格尺度の2下位尺度、NPSの5下位尺度のそれぞれの合計得点を変数として下位尺度得点の因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。因子構造を検討したところ、固有値1以上の因子が3因子抽出されたが、固有値の減衰状況と解釈可能性から2因子を抽出した。下位尺度得点の因子分析結果と因子間相関をTable4に示す。2因子全体での累積寄与率は、63.50%であった。第1因子は、NPSにおいて誇大性とされる「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」、両因子に負荷するとされる「注目・賞賛欲求」、自己愛人格尺度の「誇大性」の負荷が高かった為、「誇大特性」と命名した。一方、第2因子は、NPSにおいて過敏性とされる「自己愛的憤怒」と「自己愛性抑うつ」の負荷が高かった為、「過敏特性」と命名した。また、「自己関心・共感の欠如」は、両因子に同程度の負荷を示した。

Table 2. 自己愛人格尺度と自尊心尺度、BAQ、調和性との相関

	自己関心・共感欠如	誇大性
自尊心	-.036	.509 ***
身体攻撃	.315 ***	.117
短気	.176 **	.028
敵意	.268 ***	-.261 ***
言語攻撃	.187 **	.241 ***
BAQ 全体	.367 ***	.051
調和性	-.261 ***	.137 *

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3. 自己愛人格尺度と NPS との相関

	自己関心・共感欠如	誇大性
有能感・優越感	.275 ***	.869 ***
自己主張・自己中心	.250 ***	.460 ***

*** $p < .001$

Table 4. 自己愛人格尺度と NPS との下位尺度得点の因子パターン（主因子法・Promax 回転）と因子間相関

	F1	F2
有能感・優越感	.97	-.18
誇大性	.92	.00
自己主張性・自己中心性	.55	-.02
注目・賞賛欲求	.47	.18
自己関心・共感の欠如	.32	.30
自己愛的憤怒	.14	.91
自己愛性抑うつ	-.18	.53
因子間相関	F1	F2
	F2	.20

4. 考察

1) 自己愛人格尺度の因子分析結果

自己愛人格尺度の探索的因子分析の結果から、想定通りの2因子構造が得られた。信頼性については、各下位尺度および尺度全体における α 係数は全て.8以上を示しており、内的整合性という観点からの信頼性は十分に高いといえる。また、2因子の下位尺度間相関が中程度の有意な正の相関を示したことから、これらの2因子は

因子としては独立しながらも、自己愛という一つの構成概念としての同質性を有しているといえる。さらに確認的因子分析の結果からは許容範囲のモデル適合度が得られたことから、構成されたモデルが妥当であることが示されたといえるだろう。

2) 自己愛人格尺度の妥当性について

まず弁別的妥当性の観点から、自尊心との関連を検討した。その結果、「自己関心・共感の欠如」は仮説通り無相関という結果であった一方、「誇大性」は高い正の相関を示す結果となった。本研究では、適応の指標とされる自尊心とは相関しない誇大性の不適応的側面を測定する自己愛尺度の作成を目指したものの、「誇大性」については既存の自己愛尺度と同様、不適応的とはいえない因子であることを示唆する結果になったといえる。

次に収束的妥当性の観点から、「攻撃性」「調和性」との関連を検討した。その結果、「自己関心・共感の欠如」は高くはないものの「攻撃性」と正の相関、「調和性」と負の相関という予測通りの結果を示した。しかし、「誇大性」はこの観点からも仮説に反する結果となり、やはり不適応的とはいえない概念であることが示唆された。

さらに、併存的妥当性の観点から、既存の自己愛尺度であるNPSの「有能感・優越感」「自己主張性・自己中心性」との関連を検討した。その結果、「自己関心・共感の欠如」は両因子と低い正の相関を示すという仮説通りの結果を示した。この結果からは、「自己関心・共感の欠如」が単なる共感性の欠如を表すというより、自己愛的側面を含んだ共感性の欠如を表す概念であることが示唆されたといえる。また、低い正の相関であるということは、自己愛という構成概念を測定しながらも、既存の適応的な自己愛とは異なる側面を測定するものであるといえるだろう。一方、「誇大性」は予測に反し、両因子と中程度から高い正の相関を示した。特に、「有能感・優越感」とは.869という非常に高い正の相関であり、これらはほぼ同一の概念を測定する因子であることが示唆された。

以上のように、3つの観点から妥当性の検討を行った結果、「自己関心・共感の欠如」は全観点からの妥当性がほぼ示された一方、「誇大性」については示されなかったといえる。すなわち、本研究においては、Kernberg（1975, 1982, 1984）やDSMに描かれる不適応的な自己愛者の特徴を反映させるような項目群を作成したが、それでも「誇大性」については不適応的な自己愛を捉えうる因子にはならなかった。このことから、不適応的な自己愛の誇大性を自己評定式の質問紙法で測定することの限界が示されているのではないかとと思われる。Raskin, Novacek, & Hogan（1991）は、自己愛が防衛的自尊心と共に健康的な自尊心とも関連することを示唆しているが、自己評定式の質問紙研究ではその両者を弁別できず、「誇大性」にはそれらの要素が混在しているのではないかとと思われる。すなわち、不適応的な自己愛者に加え、健康な自尊心を有する人たちも「誇大性」に高得点をつける傾向がある為、その影響から「誇大性」が純粋に自己愛の不適応的側面のみを測定するという事は困難なのではないかと考えられる。これに対し、近年実験的研究により、健康的な自尊心と自己愛とを弁別する試みがなされつつある。例えば、Jordan, Spencer, Zanna, Hoshino-Browne, & Correll（2003）は、高自尊心の中には、潜在的自尊心が高く安定した自尊心と、潜在的自尊心が低く防衛的な自尊心が存在し、防衛的自尊心が自己愛と関連するという考えを、潜在連合テスト（Implicit Association Test）により実証した。また森尾・山口（2007）は、マウスパラダイムの

手法を用いて、高自尊心が自己愛傾向へと結びつくのは、自己概念の力動性が調節変数として働く場合であることを見出している。このように、実験的研究においては、健康的な自尊心を含まない防衛的な自尊心、すなわち不適応的な自己愛の測定がなされつつあり、誇大性の不適応的側面に関しては実験的研究による測定の方が質問紙法よりも適しているのかもしれない。

一方、「自己関心・共感の欠如」は複数の観点からの妥当性を有し、不適応的な自己愛を測定しうる概念であることが示された。この概念は既存の自己愛尺度には含まれていないものであるが、様々な理論や DSM などでは重視されている自己愛概念の一つである。ゆえに、今後この概念も用いて自己愛の研究を行うことは、より包括的に自己愛の研究を行っていく上で意義深いことであると思われる。

ところで、本研究においては、不適応的自己愛に関して臨床群と一般人との間に連続性を仮定し、一般大学生を対象に調査を行った。しかし、やはり重篤な自己愛人格障害患者から得られた Kernberg の理論に依拠する以上、そこに連続性を仮定したこと自体に問題があるのかもしれない。今後、臨床群を対象に研究することも含めて、再検討が必要であると思われる。

3) 誇大・過敏の位置づけについて

自己愛人格尺度の 2 下位尺度、NPS の 5 下位尺度の全下位尺度を用いた下位尺度得点の因子分析から、「誇大特性」と「過敏特性」を表す 2 因子が抽出された。これは Wink (1991) や谷 (2006) の 2 因子構造にはほぼ対応するものであり、自己愛人格が誇大性と過敏性の 2 側面からなる構造であることを示しているといえる。そして、「誇大性」は「誇大特性」因子に、「自己関心・共感の欠如」は両因子に高く負荷する結果が示された。Kernberg 理論においては、自己愛を誇大・過敏の 2 側面から明確には説明されていない為、「自己関心・共感の欠如」がどちらの側面に固有の概念なのかは理論上明確ではないが、本結果からは両側面に関わる概念であることが示唆されたといえる。また、第 1 因子と第 2 因子の因子間相関が .20 と正の相関を示したことは、注目に値すべきことであると思われる。近年、誇大性と過敏性を直交の 2 軸であると捉え、それを実証する研究がいくつかなされている (中山・中谷, 2006; 小塩, 2002; 清水・海塚, 2002; Wink, 1991 など)。しかし一方で、谷 (2006) では、NPS の 5 下位尺度と自己愛的甘え尺度 (稲垣, 2004) の 3 下位尺度の計 8 下位尺度で下位尺度得点の因子分析を行った結果、誇大性と過敏性を表す 2 因子間に .260 という因子間相関が示されている。そして、谷 (2006) はその結果について、自己愛的甘えを考慮することにより、自己愛の誇大性・過敏性という観点を統合して包括的に捉えうる結果である可能性を指摘している。本研究においてこの 2 因子間に正の相関が示されたことは、「自己関心・共感の欠如」が両因子に負荷している影響であると思われるが、谷 (2006) の指摘に従うと、「自己関心・共感の欠如」という自己愛概念を考慮することで、自己愛の誇大・過敏という観点についてより包括的に理解しうる可能性があるといえるのではないだろうか。しかし、この「自己関心・共感の欠如」の両因子負荷という結果は理論に基づくものではない為、今後結果の安定性を示す必要があると思われる。

5. まとめと今後の課題

本研究では新たに誇大性の不適応的側面や自己愛的な共感性の欠如を測定しうる尺度の開発を目指し、Kernberg 理論に基づきなが

ら「誇大性」「自己関心・共感の欠如」の 2 因子からなる新たな自己愛人格尺度を作成した。そして、3 つの観点からの妥当性を検討したが、「誇大性」についてはどの観点からも妥当性が示されなかった。「誇大性」は、自己愛のより病的な特徴を反映させる項目を作成しても健康的な自尊心と不適応的な自己愛とが混在する概念になってしまうと考えられる為、今後この概念を測定する際には測定方法自体を慎重に考えていく必要があると思われる。一方、「自己関心・共感の欠如」は、全観点からの妥当性が示され、また誇大性・過敏性の両側面に関わり、この両側面を包括的に捉えうる概念である可能性が示唆された。今後、適応的自己愛と不適応的自己愛の相違を明確にしていく上で、また誇大的側面と過敏的側面を総合的に捉えていく上で、「自己関心・共感の欠如」も用いて研究を行うことは有効であるといえるだろう。

また、近年自尊心の安定性理論 (Kernis, Cornell, Sun, Berry, & Harlow, 1993) に基づき、自己愛と自尊心の不安定性との関連を検討する研究がなされている (小塩, 2001; Rhodewalt, Madrian, & Cheney, 1998 など) が、それらの研究において自己愛の測定に自己愛的な共感性の欠如は含まれていない。しかし Kernberg (1982) は、病的誇大自己が形成された結果として、自己評価の不安定性と共感性の欠如が関連することを示唆しており、今後の課題として「自己関心・共感の欠如」も含めて自尊心の不安定性との関連を再検討することは、意義のあることと思われる。

そして最後に、そもそも Kernberg 理論に基づく場合、その不適応的自己愛に関して臨床群と一般人とに連続性を仮定することが妥当であるかどうかも含めて再検討する必要もあると思われる。

引用文献

- 相澤直樹 (2002). 自己愛人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究, 50, 215-224.
- American Psychiatric Association (2002). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders forth edition text revised: DSM- IV -TR*. Washington, D. C. : Author.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子 (1999). 日本版 Buss - Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, 70, 384-392.
- Broucek, F. (1991). *Shame and the Self*. New York : The Guilford Press.
- Ellis, H. (1898). Auto-erotism : A Psychological study. *Alienist and Neurologist*, 19, 269-290.
- Emmons, R. A. (1984). Factor analysis and construct validity of Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, 48, 291-300.
- Freud, S. (1914). *Zur Einführung des NarziBnus*, GW, Bd. X, S. 138-170. (懸田克躬・吉村博次訳 (1969). ナルシズム入門 フロイト著作集 5 人文書院 pp.109-133.)
- Gabbard, G. (1994). *Psychodynamic Psychiatry in Clinical Practice. The DSM- IV edition*. New York : American Psychiatric Press. (館哲朗監訳 (1998). 精神力動的精神医学 その臨床実践 [DSM - IV 版] ③臨床編 : II 軸障害 岩崎学術出版社)

- 稲垣実果 (2004). 日本的自己愛尺度の作成に関する研究 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, **68**.
- 伊藤 洸 (1989). コフートの自己愛論 青年心理, **73**, 12-22.
- Jordan, C. H., Spencer, S. J., Zanna, M. P., Hoshino-Browne, E., & Correll, J. (2003). Secure and defensive high self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, **85**, 969-978.
- 上地雄一郎・宮下一博 (1992). 自己愛の発達と障害及びその測定に関する研究の概観 [1] 岡山県立短期大学研究紀要, **37**, 107-117.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成 パーソナリティ研究, **14**, 80-91.
- 狩野力八郎 (1995). ナルシシズムの病理と治療技法 精神分析研究, **39**, 128-139.
- Kernberg, O. F. (1975). *Borderline Conditions and Pathological Narcissism*. New York: Jason Aronson.
- Kernberg, O. F. (1982). Narcissism. In Sander L. Gilman (Eds), *Introducing Psychoanalytic Theory*. New York: Brunner/Mazel pp.126-136. (小此木啓吾訳 (1984). 自己愛 岩波講座精神の科学 別巻 岩波書店 pp.279-296.)
- Kernberg, O. F. (1984). *Severe Personality Disorders: Psychotherapeutic Strategies*. Yale University Press. (西園昌久監訳 (1996). 重症パーソナリティ障害 岩崎学術出版社)
- Kernis, M. H., Cornell, D. P., Sun, C. R., Berry, & Harlow, T. (1993). There's more to self-esteem than whether it is high or low. *Journal of Personality and Social Psychology*, **65**, 1190-1204.
- Kohut, H. (1971). *The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press. (水野信義訳 笠原 嘉監訳 (1994). 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. (1977). *The Restoration of the Self*. New York: International Universities Press. (本城秀次訳 笠原 嘉監訳 (1995). 自己の修復 みすず書房)
- 森尾博昭・山口 勲 (2007). 自尊心の効果に対する調節変数としての自己概念の力動性—ナルシシズムとの関連から— 実験社会心理学研究, **46**, 120-132.
- 宮下一博・上地雄一郎 (1985). 青年におけるナルシシズム (自己愛) 的傾向に関する実証的研究 (1) 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, **1**, 51-61.
- 中山留美子・中谷素之 (2006). 青年期における自己愛の構造と発達の变化の検討 教育心理学研究, **54**, 188-198.
- 岡田 努 (1999). 現代青年に特有な友人関係の取り方と自己愛傾向の関連について 立教大学教職研究, **9**, 21-31.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 (1981). 自己愛人間 朝日出版社
- 小此木啓吾 (1984). 解説 岩波講座 精神の科学別巻 岩波書店 pp.297-315.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987). ナルシシズム的人格の基礎的研究 (1) —ナルシシズム的人格目録の信頼性と妥当性について 日本教育心理学会第 29 回総会発表論文集, 534-535.
- 小塩真司 (1998). 青年期の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係とのあり方との関連 教育心理学研究, **46**, 34-44.
- 小塩真司 (1999). 高校生における自己愛傾向と友人関係とのあり方との関連 性格心理学研究, **8**, 1-11.
- 小塩真司 (2001). 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究, **10**, 35-44.
- 小塩真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, **50**, 261-270.
- 小塩真司 (2004). 自己愛の青年心理学 ナカニシヤ出版
- 小塩真司 (2005). 自己愛人格の構造と適応過程 梶田叡一 (編) 自己意識研究の現在 2 ナカニシヤ出版 pp.101-118.
- Pulver, S. E. (1970). Narcissism: The term and the concept. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-341.
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1979). A Narcissistic Personality Inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Raskin, R. N., & Hall, C. S. (1981). The narcissistic personality inventory: alternate form reliability and further evidence of construct validity. *Journal of Personality Assessment*, **45**, 159-162.
- Raskin, R. N., Novacek, J. & Hogan, R. (1991). Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, **59**, 19-38.
- Rhodewalt, F., Madrian, J. C., & Cheney, S. (1998). Narcissism, Self-knowledge, organization, and emotional reactivity: the effect of daily experience on self-esteem and affect. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 75-87.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐方哲彦 (1986). 自己愛人格の心理測定—自己愛人格目録 (NPI) の開発— 和歌山県立医科大学進学課程紀要, **16**, 77-86.
- 清水健司・海塚敏郎 (2002). 青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の関連 教育心理学研究, **50**, 54-64.
- 高橋智子 (1998). 青年のナルシシズムに関する研究—ナルシシズムの 2 つの側面を測定する尺度の作成— 日本教育心理学会第 40 回総会発表論文集, 147.
- 谷 冬彦 (2001). 青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成— 教育心理学研究, **49**, 265-273.
- 谷 冬彦 (2004a). 新たな自己愛人格尺度の作成 (1) —因子構造と対人恐怖心性との弁別性の確認— 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 69.
- 谷 冬彦 (2004b). 新たな自己愛人格尺度の作成 (2) —自我同一性と自尊心との関連から— 日本教育心理学会第 46 回総会発表論文集, 52.
- 谷 冬彦 (2006). 自己愛人格と自己愛的甘えに関する研究 日本心理学会第 70 回大会発表論文集, 22.
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, **67**, 61-67.
- Watson, P. J., & Biderman, M. D. (1993). Narcissistic personality inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 41-57.
- Watson, P. J., Grisham, S. O., Trotter, M. V., & Biderman, M. D. (1984). Narcissism and empathy: Validity evidence for the Narcissistic Personality Inventory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 301-305.
- Wink, P. (1991). Two faces of narcissism. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 590-597.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.